

近世和歌山城下と周辺の花風景

奈良県立大学 教授
水谷 知生

1. はじめに

現代の紀の川沿いから和歌山市にかけての花の名所として、『花紀行 関西花の旅』(山と溪谷社大阪支社編 2004)では、子安地藏寺のフジ(橋本市), 桃山町のモモ, 粉河寺のサツキ(紀の川市), 根来寺のサクラ(岩出市), 和歌山城のサクラ, 紀三井寺のサクラ, 養翠園のカキツバタ(和歌山市)があげられている。いずれも江戸期には花がみられ, 花を賞でる場所として継承されてきたと考えられる。江戸では文政年間に『江戸名所花暦』によって季節にふさわしい花鳥風月の名所が挿絵とともに紹介され, 上野, 飛鳥山など人々が集まる花見の名所があったことが知られるが, 京都, 大阪, 江戸の三都ばかりでなく仙台, 名古屋, 熊本などでも桜の名所があったという(小野 1992)。和歌山城下周辺では春の花はどのような形で賞でられていたのだろうか。

2. 武家の日記にみる花の名所

2.1 小梅日記にみる花

和歌山には, 幕末から明治に生きた川合小梅(1804:文化元年-1889:明治 22 年)が 16 歳から亡くなるまで書き続けたという日記の一部が残されている。小梅は和歌山藩藩校学習館の督学(校長)となった川合豹蔵の妻で, 和歌山城下北部に居住し, 春の時期が記されている日記は, 1837, 1848, 1851, 1853, 1859, 1861, 1864, 1865, 1867, 1876, 1877, 1878, 1880, 1881, 1882 年の 15 年分ある。

表 1 「小梅日記」での春(新暦で 2~5 月)の花の種類別の記述された日の数(複数の花が記されている場合は花種ごとに複数カウント)と花に関係し言及された場所と花種

西暦	和暦	花の種類					言及された状況(数字は花の種類)		
		①サクラ	②フジ	③ボタン	④カキツバタ, ショウブ	⑤その他	小梅が見た	家族が見た/招待された	人づての話
1837	天保 8				1			他邸④	
1848	弘化 5	1						覚円寺①	
1851	嘉永 4	3	3				正住寺②	正住寺② 他邸①	紀三井寺・根来寺・直川観音①
1853	嘉永 6	3	1				直川観音・正住寺①	他邸①②	
1859	安政 6	5	1	1	1	シデコブシ, ヤマブキ	正住寺・宗泉寺①, 御用地御殿④, 自邸①⑤, 他邸①⑤	他邸①②③	
1861	文久元	5					正住寺・直川観音・他邸①		他邸①
1864	元治元	4	1	1		ニワウメ, コブシ	正住寺①, 自邸①⑤, 他邸②③	他邸①	
1865	元治 2	3		1		ウメ	根来寺①, 自邸③, 他邸①	他邸①⑤	
1867	慶応 3	5	1	3			自邸①③	他邸②③	根来寺・和田・御坊①
1876	明治 9	1						根来寺①	
1877	明治 10	4				キリシマ	土手・自邸①, 他邸①⑤		
1878	明治 11	1		1		スモモ	土手①, 自邸③⑤		
1880	明治 13	4					土手, 自邸①		
1881	明治 14	3		1	1	キリシマ, バラ	土手①, 自邸①③, 他邸④⑤		
1882	明治 15	1					土手①		
計		43	7	8	3	9			

この各年に春の花を賞でる記述がみられ、幕末から明治初期の春の状況を知ることができる。「小梅日記」に登場する春の花を賞でる記述を表1にまとめた。1851(嘉永4)年3月29日(新暦4月30日)「夜五つ過ぎ主人かへる。正住寺の藤咲きこぼるほどのよし。」など、小梅以外に主人が行った、見てきたとする記述も含んでいる。また、1864(元治元)年2月28日(新暦4月4日)「塚山又太郎方へ花見に行」など、他邸に花見に呼ばれて行くことも数多く見られる。1867(慶応3)年3月5日(新暦4月9日)「花は皆ちり過、庭の牡丹咲かけ」など、自邸の庭の花についての記述も含まれる。地名か個人邸名かの区別がつきにくい記述もあるが、地名と判断できないものは個人邸と整理し、言及されている場所と花種を表1に示し、また言及される場所を図1に示した。図1に西暦年の記述がある箇所は、小梅自身が訪れた年である。

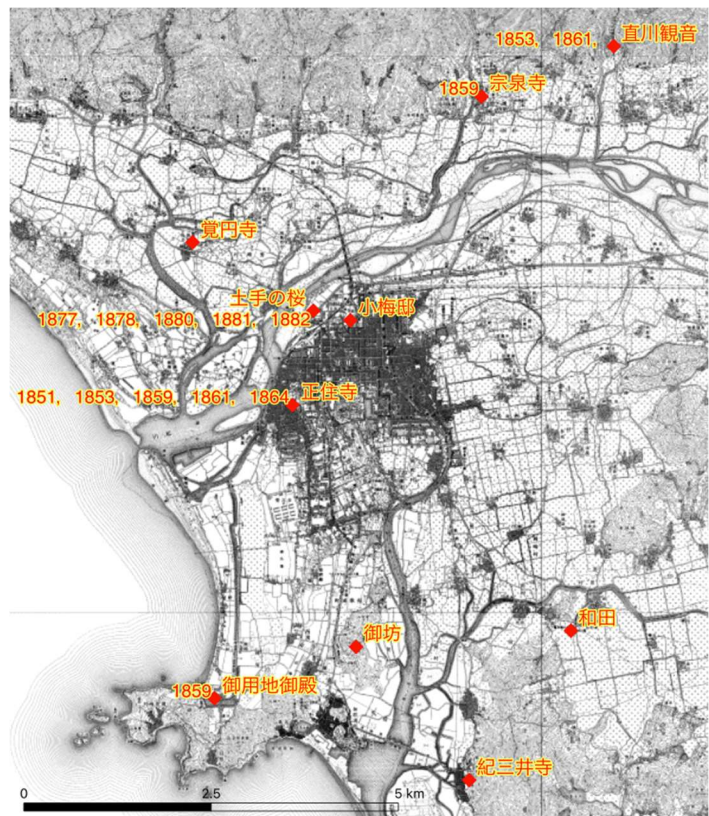


図1 「小梅日記」で春の花が賞でられた場所(数字は小梅が訪れた西暦年)基図は1910年測図2万分の1「和歌山」「和歌浦」、今昔マップ on the Webより

春の花に言及する記述70のうち6割がサクラで、ボタン、フジが続く。サクラについては1837(天保8)年を除く毎年記述がみられ、小梅自身は、正住寺、直川観音などに出向いている。正住寺は和歌山城西側に位置する寺院で、小梅邸からは1.7kmほどで、寺の日導上人と豹蔵、小梅とは親交があり、幕末にはしばしば訪れている。1851(嘉永4)年にはフジの花が咲いたと呼ばれ赴くが、「藤の花も当年はよろしからねど残り有」(旧4月5日)と、この年のフジの評価は高くない。現在、正住寺の鐘楼横にはサクラの大木がみられるが、当時のなごりであろうか。

直川観音は紀の川の北岸に位置し、千手観音を本尊とする本恵寺の別名である。小梅邸から6km程の道のりにあり、嘉永年間には小梅や家人が頻繁に参詣した記述が残され、サクラの時期にあたれば花を見に訪れたということだろう。現在も参道両側にサクラとモミジが見られ、幕末の様子は残されており、川合家の信仰対象であったこととは別に花や紅葉の名所の一つとなっていたであろう。本恵寺は8世紀に役行者による開創、草創の地は背後の大福山山中の弁天の窟と伝わり(葛城修験日本遺産活用推進協議会2023)、現在、日本遺産「葛城修験」の構成文化財と位置づけられている。

根来寺は、現在、サクラの名所として人々が訪れるが、小梅日記でもしばしば取り上げられている。小梅邸からは15km以上の道のりの位置にある(図3参照)が、15年のうち自身が訪れた記録は1865(元治2)年だけである。同じく現在までサクラの名所である紀三井寺は、距離は7kmほどで話題としてはでてくるが、家人も含め訪れた記録はない。和田、御坊山もサクラの咲く場所としてあげられており、サクラの名所は数多くあったようである。

2.2 身近な場所の花

サクラは自邸にもあったようで、また、城下の他邸にサクラを見にでかけることも多い。移動手段が限られていたためもあるだろうが、サクラの名所と言われる場所に花を見に出かけることはあまりない。サクラ以外

の春の花も含め、近隣の武家屋敷や社寺に花木が多くみられ、遠出をすることなく花を賞でることができる環境であった。江戸期の城下町において、武家屋敷が緑地の確保に果たしていた役割は大きいことが小梅日記の記録でもうかがわれる。一方で、1851(嘉永 4)年 3 月 7 日(旧暦)に、川原に総勢 11 名で行き、ひどく酔ったことが記されている。3 月 9 日には「追々花咲」と記されていることから、満開の花の下というわけではないが、川原での少し早い花見だったと考えられる。

明治の最初期の日記は残されていないが、明治 10 年代の日記では、サクラは土手で賞でている。土手とあるだけで、その位置は示されていないが、1877(明治 10)年 4 月には「昨日は極上の天気ゆへ土手の桜見に行」、「夕方お米ら子供つれ土手の桜見に行」など、思いついた時に子供つれで気軽に行かれる場所であることから、明治期の 2 万分の 1 地形図において紀の川南岸の土手で、小梅邸から近い位置と想定して図 1 に示した。先述の嘉永 4 年に花見をした川原と同じ場所であろう。小梅は明治 10 年には 70 歳を迎えた年齢もあつてか、この時期は花を見に遠出することはない。土手に植栽されていたサクラの数やどの程度の人が集まったかの記録はないが、身近に花見ができるオープンな場所として川原があったようである。

2. 3 紀州落水軒御用地

1859(安政 6)年旧暦 4 月に小梅が訪れた「御用地御殿」は、現在養翠園として公開されている旧徳川家の庭園である。「池には杜若、少し盛は過ぎたれども紫と白の花美しく咲乱れ、夏木立の青々として気色よし」と記され、小梅が目にした池は現在もカキツバタ、アヤメの名所となっている。御用地の庭園は紀州藩 10 代藩主徳川治宝によって文政年間に造営され、治宝公が 1852(嘉永 5)年に逝去後に御用地は家老三浦家に払い下げられる。1888(明治 21)年に徳川頼倫によって買い戻され、1933(昭和 8)年に再び堺の藤井家へ売却されるが、旧形のまま永く保存されるようにとの口約があったという(田中 1950, 1958)。藤井家では私財をなげうってこれを維持したが、戦後、旧御用地全体の 3 分の 2 を農地として買収される。残された庭園部分 6,827 坪の保存に努め、1955(昭和 30)年に養翠園として一般公開し、現在に至っている(三尾 1994)。1958(昭和 33)年に県指定名勝紀藩落水軒御用地に、1989(平成元)年に国指定名勝養翠園に指定されているが、徳川御三家の一つの庭園と建物を私たちが目にすることができるありがたさをかみしめたい。



図 2 養翠園の庭園(カキツバタはこの汐入の池とは別に雨水をためた池にみられる)

3. 旅人がみたサクラ

江戸期に和歌山を訪れた旅人は花をどうみていたのだろうか。現代のように花を見に旅をすることはないが、江戸期に伊勢参りに訪れた旅人は多く、「道中記」「道中日記」と題した宿泊場所、経費などを記載した日記形式の帳面を記している。佐藤(2014)は和歌山県内を通過した 1693(元禄 6)年から 1876(明治 9)年までの 200 件あまりの旅人の道中記類から、和歌山県下を旅した者の主要な 2 ルートを整理している。一つは伊勢参宮の後、西国三十三ヵ所巡礼に入り、1 番の青岸渡寺から 2 番紀三井寺、3 番粉河寺と紀伊を縦断し、4 番の河内の槇尾寺に至るルートで、二つ目は伊勢参宮から奈良の寺社参詣をし、その後高野山から紀の川沿いに和歌山に入るルートである。

伊勢参宮の後、一番、二番札所の青岸渡寺、紀三井寺までの距離はあるが西国三十三ヵ所を巡る旅人は多く、佐藤のリストでも100件は確認される。和歌山城下周辺の花の名所としては、紀三井寺、根来寺(サクラ)、粉河寺(サツキ)があるが、紀三井寺は二番札所、根来寺は札所ではなく、紀三井寺から三番粉河寺に至る途中に数キロほど寄り道をする形で訪れることとなる。江戸期の旅人も札所以外の名所には関心なく先を急ぐ者が多かったのか、紀三井寺と粉河寺の間に根来寺に立ち寄った者は巡礼者の3分の1であった。このうちサクラの開花期(旧暦2月後半から3月前半)にちょうど訪れた記録は7件みられた。

道中記類は宿泊場所や支出内訳を羅列する記録が多く、名所についての所感が記されることはほとんどないが、根来寺については、「桜数多さきそいあり」(弘化2年「伊勢参宮覚」)など3者が記録にとめている。このうち2者は粉河寺のサクラも評しており、こちらも見ものだったようである。根来寺は1585(天正13)年に豊臣秀吉に攻められ、2,3の堂宇を残して全山焼失し、1800年代には再建事業が進められる。「大堂焼失、只今普請始まり、…必ず参詣致す可き所」(文政5年「伊勢参宮并大社拝礼紀行」)と評価する記録もあるが、「根来へは廻り参詣する程ニも不及事也」(文政11年「伊勢参宮花能笠日記」)と、立ち寄る意味はないとの評価もあり、見解は分かれる。後者は旧暦3月下旬、サクラの時期の訪問ではなく、時期が違えば見方も変わっていたかもしれない。一方、紀三井寺では景色のよさに言及した記述はみられるが、サクラに言及した道中記は確認できない。江戸後期の旅人にとって和歌山城下付近では、根来寺、粉河寺がサクラが印象に残る名所だったといえよう。粉河寺はサツキについても「本堂前ニ色々の石を取集メ、さつき、そてつ、(略)見事也」(天保7年4月「順礼道中日記」)と記されている。城下町にあった身近な花木の多くは残されていないが、城下周辺部の寺社の花の名所は近世から引き続き名所であり続けている。

【参考文献】

- 小野佐和子(1992)『江戸の花見』築地書館, pp.49-50
 山と溪谷社大阪支社編(2004)『花紀行 関西花の旅』, 山と溪谷社
 佐藤顕(2014)江戸時代、紀伊の寺社めぐり、和歌山市立博物館編『江戸時代を観光しようー城下町和歌山と寺社参詣』89-103
 葛城修験日本遺産活用推進協議会(2023)『日本遺産葛城修験 里人とともに守り伝える修験道はじまりの地構成文化財調査報告書』
 田中敬忠(1950)紀藩水軒御用地址、和歌山県『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告書第22輯』
 田中敬忠(1958)養翠園(紀藩水軒御用地址)、和歌山県『和歌山県文化財調査報告書第三集』
 三尾功(1994)西浜御殿と養翠園について、和歌山市立博物館研究紀要9, 1-17

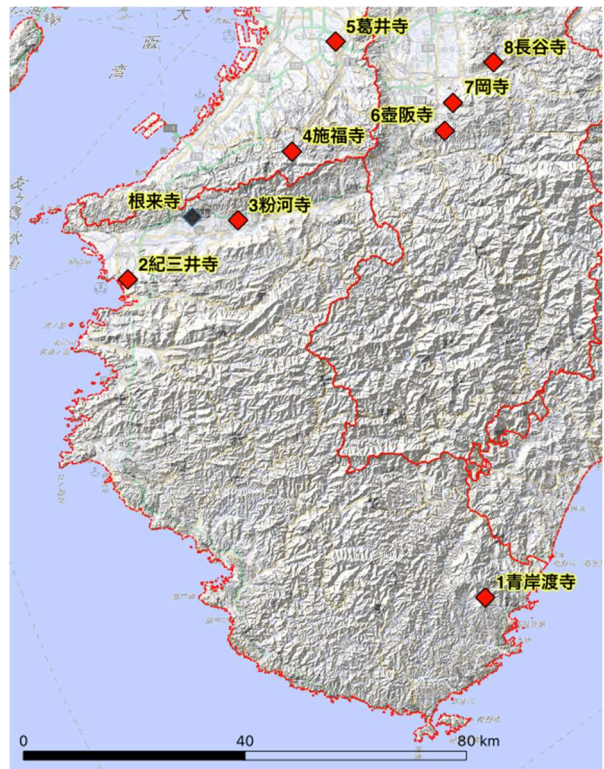


図3 西国三十三ヵ所1番～8番札所の位置関係
 基図は地理院地図陰影起伏図と淡色地図



図4 根来寺多宝塔とサクラ